



危険物の受入立会いをするようになって

扇子 薫

(ゼオンノース㈱エンジニアリング第一事業部
元ゼオン高岡サービス㈱出荷G)

化学工場に入社し、事務としての業務を長年やってきました。組織改正及び配属が現場の事務となり、製造課の委託作業も出て来る中でA重油・灯油受入作業の立会い業務が新たに発生し、私に出来ないかと言われました。何でもやってみよう・挑戦してみようの思いで危険物乙4類の資格を持っていなかったのに、急遽免許取得のための勉強を始めました。今まで何となくしかわかっていなかった油類の性質や火災予防・消火方法などもわかり、特に法令は製造所の基準が多くあり難解なものでした。また合格へのプレッシャーもかかり大変でしたが、自己啓発として有意義な日々でした。

試験は、意外な問題が出題されかなり悩んだりもしましたが、1回目で無事合格でき、資格を得る事ができました。とはいえ、今まで立会いなどしたことが無かったので、まずは製造課の方から立会い教育を受けました。マニュアルをもらい、現場にて実際の立会いの仕方や、緊急時の対応（砂袋やオイルフェンスの場所、消火器の確認）などを教わり、いよいよ立会いの作業がスタートしました。化学工場で女性が立会いをするのは結構珍しいらしく、ローリー運転手さんには驚かれたりもしました。

工場ではA重油・灯油を受入っていますが、受入れホースサイズに大小の違いがありアタッチメントにも工夫がしてあり、絶対に間違えて受入できないFP化がされていることに、現場に出て初めて製造現場の「質の高さ」を体験しました。

各タンク側にチェックシートのBOXがあり、運転手さんにチェックしてもらい、最後に私がサインします。すぐそばに河川がありますので、火災はもちろんですが油の飛散にいちばん気を配ります。ちょっとでも側溝・路面に落ちると大きく拡散し、何時までも尾を引くからです。

資格をとったものの、実際に現場に立つのはこれが初めての経験ですので、製造課のフォアマンから月に1回程度で5ヶ月間危険物の教育も受けました。やはり実際に作業をしてみると試験と違い、本当に理解できていなかったものも実感としてわかるようになり、例えば、静電気防止対策として除電棒が現場詰所の前に設置してありますが、今までは何をするものかわからなかった私も、具体的な工場での事故事例教育を受けることで、とても危険予知の感性が高くなったと思っています。

また、ローリー立会いの仕事を始めた当時はヘルメット、安全メガネの着用は義務付けられていましたが、工場の方針である「決めたことを守る」を遵守し、まず私が立会い時に安全メガネをかけることを実践しました。その後出入りの協力会社の方、全員が安全メガネの着用を義務づける規則になり、日常私が安全メガネを着用している姿をみている運転手さんには、浸透もスムーズに進みました。また、万が一忘れてこられた人の場合のために予備品を常備し貸与する提案も行ない、今も実施しています。

私の作業改善のひとつに「タンクレベル計の移設」があります。改善前にはタンクのレベル

計は屋外の階段を昇ったところにありました。現在はズボン姿ですが、当初事務用スカートで作業している私を見て、ある部課長さんから「その服装では危ないよ」と指摘受けたり、現場作業の未熟さがいっぱいありました。特に雨天や積雪時はすべて、ヒヤリとすることも多く、また運転手さんも高齢化が進んでおり、その意味で日頃から危険と感じていることを提案して、レベル計を上から下に下げる改善策を提出して対策を実施してもらいました。改善後は、階段の昇降がなくなり、安全な作業確保ができるようになり大変好評を得ることが出来ました。(写真参考)

私の職場では始業時のミーティングの最後には『KYK』（危険予知活動）の一環として「一言KY」を課員で唱和しますが、その中には「A重油・灯油受入立会い時は、車止め・アース確認 ヨシ！」を追加し、唱和しています。

もちろん現場においてもバルブの「あけ」「しめ」、ホースの脱着、オイル受け、車止め、アース、レベル等、一つひとつを指差し呼称しながら確認し指先に意識を込めて実践しています。

定期的に漏洩を想定した緊急訓練も実施し、反省会では女性の私でも取り扱い出来るように土囊のBOXの位置を変更して欲しい・砂袋の量も少し軽くし運べる重さにして欲しい、電話も携帯ですぐに連絡できるようにして欲しいと要望し、改善してもらいました。

また、毎年総合防災訓練を行っていますが、一昨年は私が立会い業務の消火活動でケガをする(当時、階段を昇っていた)想定でケガ人役で訓練にも参加しました。今までは庶務班として連絡係をしていましたが、実際にケガ人の役をしますとますます安全に作業を行わなければと決意を新たにすることができました。

他にも製造課と合同でA重油が漏洩した異常想定訓練も計画的に実施し、緊急連絡ルートの確認や実際の応急処置方法も訓練しています。

とにかく、双方の協力とお互い注意し合う風土があってこそ、無事故・安全が実現すると信じていますので、これからも日々精進して改善箇所があれば提案していき、安全に業務を遂行して行きたいと思います。

